

とある男は赤獅子となった

アリファ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マギを読む、ジンかつこいー！モツさんかわいー！

ファナリスやベえ：っしや、ダンまちにぶち込んだろ。

ジンって一応精霊やし、ダンジョンもあるし、なんかこう上手いこと行くやろ。

モルさんになったオリ主がチート金属器で死にかけながらベルくん達と成長する話（の予定）

こんな感じで後先考えずに書いたちよつと前の感覚を取り戻すための小説です。

あつ無理。つてなつたら見ずにGO back.

その方がお互い幸せになれるし嫌々見て酷評されたら作者は泣いて失踪する。

ほかアね、ただ、モルさんが自己犠牲して神達が勘違いでシリアス（笑）する話を書きたいだけなんよ。

目次

1話

赤獅子は生まれ落ちる

1

1話

赤獅子は生まれ落ちる

頭に多少の痛みを感じながら目を覚ます。

1番に目に入ってくるのは眩しすぎる程の白色。明らかに自分がいた部屋でないのは一目瞭然だ。

「おはよう。ようこそ——、君は僕に選ばれた。」

若いような年老いているような、男とも女とも聞き取れる声がすぐ側から聞こえてくる。

寝起きだからか、頭の痛みからか何を言っているのか少ししか理解できない。

「僕は誰かを別の世界に送って観察するのが生きがいだね」

声のするほうを見れば白色に発光する人型がしやがみこんでこちらに話しかけていた。

「——でも君がすぐに死んだら楽しめないだろ？それにただ平和に暮らされても面白くない。だから——」

頭の痛みがより酷くなってきた。

発光体の言うことを気にする余裕がない。まだ何か話してきてくれるが上手く聞き取れない。

「君が最後に読んでた漫画、アレの力をあげるよ。ああ、安心して、登場してないのも含めて72体全てだよ。」

漫画。72体。

辛うじて聞こえた単語だが、考える余裕がない。

酷い頭痛だ、吐き気までしてきた。

体も溶けるようで全身が痛い。

自分が自分で無くなるようだ。喉からは度数の強い酒飲んだときなんて比べ物にならないほどの焼けた痛みがする。

「君の姿も身体能力も漫画のキャラを模してあげたから思う存分楽しんでくるといい。」

頭の外側、頭皮も燃えるような感覚が続く。

短かった黒髪は長く、赤く。

顔を覆う腕は細く、白く。

「あう……っ」

漏れ出た声は男のものとは程遠い程良く高い声に。

「君がどんな物語を見せてくれるのか今から楽しみにしているよ。」

全身の痛みが引くと共に意識は闇に落ちていく。

完全に落ちる直前にするりと頭に入り込んできたのは私の新しい名前だった。

「少しだけサービスだ、”モルジアナ”くん」

冒険都市オラリオ、中央にある建造物バベルの地下にはダンジョンが広がっている。

エルフ、獣人、小人、人間など様々な種族が、天界から刺激を求めて降りてきた神達から恩恵を受けて冒険者となりそれぞれの想いを胸にダンジョンに入っていく。

1人の神のたった1人の眷属も例に漏れずダンジョンに向かう。

幼い頃祖父から聞いた英雄、ハーレムに憧れて。

「行つてきます！神様ー！」

「気をつけるんだよー！ベルくん！」

ホームであるほぼ廃墟のような教会から白髪の少年ベルがバベルに向けてかけていく。

見送る神へスティアはその豊満な胸をたゆんと揺らし自身もバイ

トの準備をしていた。

目を覚ます。

ズキズキとする頭を片手で押さえると赤い髪が目の前でサラリと揺れる。

ハツとして目を自身の体に向けると無地の布服に木製の帯留め、大きくはないが確かにある膨らみ、そして脚飾り。

最後に聞いた名前、モルジアナ。

頭が理解してきたと共に胃が締め付けられるような感覚に陥る。

漫画、72体、赤髪、モルジアナ。

与えられたのはマギの精霊と戦闘民族の力だと。

ファナリス、地の戦闘能力はマギにおいて最上位だ。

ただ、魔力の量が非常に少ない。

単純に高い戦闘能力は荒事に関して、良くも悪くもどうにかできるだろう。

精霊、アルマトランと呼ばれる崩壊した世界の住人たち。様々な種族があり、その能力も多種多様だ。八芒星が刻まれたジンの金属器に魔力を通すことでその力を引き出せる。

何が言いたいかと言うと、ファナリスは精霊を扱うには圧倒的に魔力が足りていない。

ハーフのファナリスでも数分しかジンの力を最大限発揮できない。大技に至っては撃つただけで魔力をほぼ全て消費する。

モルジアナは純ファナリス。魔力の量は精霊の力の度合いにもよるが数秒くほんの数分使用するだけで枯渇してしまう。

頭から手を離してみれば鎖の付いた煌びやかな腕輪に八芒星が刻まれていた。もしかしくともマジの主人公アリババの眷属器だった腕輪が精霊ジンの金属器に変わっている。

精霊は1つの金属器に対して1人まで。ということはあと71個の金属器があるはずだ。

全てつけるとなると派手、なんてものではないし確実に持ちきれないだろう。

そんなことを考えていると初めて嗅ぐ獣臭いにおいと多数の生物に取り囲まれたような気配がした。

ハツとして視線を上げれば狼のような人型のモンスターが理性のない目で私を見ている。

見える景色から分かるのはここはどこぞの迷宮ダンジョンということだ、今持っている金属器は1つ。考えられるのは残り71のどれかの迷宮である可能性が高い。

あの発光体は私を観察すると言っていた。
72体全てと言うのはつまり、71体を自力で集めろということだろう。

すぐさま立ち上がりファイティングポーズを取る。

腕輪に宿っている精霊ジンが分からないいうえに使ったら魔力切れになることは明白なので肉弾戦しか残されていない。

ファナリスの身体能力を持つ、つまりはほぼ瞬間移動や壁を垂直に走ることができるほどの脚力。大岩を片手で持ち上げ、投げつけるだけの腕力があるということ。

迷宮生物と言えど殴れば倒せるはず。

見たところ相手はたぶんただの狼人間。

こちらが構えたことで狼たちも動き始めた。

ろくな知恵もなく爪や牙を立てて襲い来る狼達。

私は蹴りを放つために片足を踏み込んだ。

衝撃。

踏みしめた地面は陥没し、今までではありえない速度で狼達へと接近する。

すでに足は地面から離れており、自力で止めることは出来ない。仕方なしにもう片方の足をライダーキックの形で狼に当てると跡形もなく狼は爆散した。

爆散した狼がいたところに着地し、振り返りざまに左側にいた狼の頭部を蹴る。

またもや爆散。その場には紫色の水晶が残っていた。

見た目より硬かったのか2体倒したところで自分の脚にも少しの反動がきている、だがまだまだ余裕はある。

奥からゾロゾロと出てくる狼達は味方が死んだことになんのもないのだろう、ただ私を殺そうと襲いかかっている。

いつの間にか増えた敵をまた地面と水平にライダーキックをかまして数を減らす。倒した敵は灰になるのか白い煙がボンボンと音を立てて消える。

水晶を拾う余裕がないのでそのままにしているが数が多くなってきて踏んでしまうことが増えた。

チクチクとした足の痛みに耐えながら敵を殲滅し終わり、後に残った大量の水晶を集めながらどうしたものか、と思索する。

もったいないのでとりあえず集めて持てるだけ抱えていると奥から誰かが歩いてくる音が聞こえた。

頬にかかってしまった狼の血の匂いで鼻が利かないのがすこし残念だが、聞こえている音は明らかに靴の音、それも一つだけ。

水晶を通路の横の方にまとめて奥から来る者を待ち構える。

脚が少しだけ痺れているが先程の量さえ来なければ悪化はしないだろう。

人の形をした迷宮生物ならば討伐、人ならばこの迷宮が第何迷宮なのかは聞きたいところだ。

地を踏みしめる音が大きくなる。

すぐに動けるように半歩引いて重心をやや前にかけた。

「あれ、おかしいな……こっちに行っただと思ったのに……」

通路の奥から来たのはどこか兎を思わせる白髪の少年だった。